

沖縄の民間宗教の研究(その二)

田路 慧

御 嶽 (承前)

これまで見てきたように沖縄において聖地・御嶽として崇められているのは祖先の霊、霊の依り代としての岩石や樹木・山や森、井泉や火など人々の生命の根源となるものであったが、土・土地もまた、母なる大地ともいわれるように生命を産み育て支える母胎である。土地は古来各地において地・水・火・風の四大といつて生けるものを構成する一大要素とされている。日本本土では「うぶすなさま(産土神)」と呼ばれ、鎮守の森に祀られている。沖縄でも大地は土地神として各地に祀られているが、道教の影響を受け「土帝君(トイティークン)」と呼ばれ、「土地君」がなまってそう呼ばれるようになったのではないかとされている。土帝君は大地の神として村の人々の豊作と健康と繁栄をもたらす神として崇拜されている。土帝君はまた墓の守り神としても崇められているところもあるが、沖縄本土中南部では墓地の守護神として「ヒジャイ」が祀られている。この神も中国から伝来したものである。(写真1)は伊是名島の土帝君である。祠の中には道教風の神像が祀られていたが、盗まれたとのことであつた。他の地域でも盗まれたところがあるようである。

光と熱をもって生命を育む太陽崇拜は古代エジプトやインカ、アステイアなど世界各地、特に農耕民族や寒冷地の人々に見られるが、沖縄においては、熱帯地方と同様に、日中のぎらぎら照りつける炎熱の太陽は崇拜されることはない。しかし暗黒の夜のとばりを破つて東方より光り輝き昇り来て生命に目覚めと活力を与える暁の「若太陽ワカタダ」は崇拜されている。太陽

陽テダはミルヤ・カナヤ(太陽の居所)より照り上がり、夕べには西の「太陽の崖」より死んで落ちていき、またその居所(居所)に帰りそこで再生して再び照り上がる、と考えられていたようである。古歌謡集『おもろさうし』には次のように詠われている。「ミルヤ照る照り上がり、照り上がりは崇べて、按司添いがお使いにて走りおる、又カナヤ照る照り上がり」(首里船歌の節)『おもろ』にはまた「テダガアナ(太陽の穴)」という表現もあり、「天の岩戸」のように太陽の籠もる穴が想定されている。このように太陽はその活動から死と再生のイメージと重ねて考えられており、ニルヤ・カ

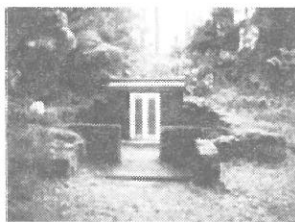


写真 1

ナヤ（ニライ・カナイ）で死者が往き籠もり再生し還るというイメージは太陽の運行から類推して想定されたものといえることができるであろう。琉球王府時代になると太陽は神格化され天上のオボツ・カグラが太陽や祖霊の居所とされ、琉球王は天下ったその子孫として神格化、権威付けがなされたようである。太陽を祀る御嶽ないし拝所を探したが見つかることができなかった。久米島に「ウティダ石（太陽石）」と呼ばれる遺跡があったが（写真2）拝所ではなく、太陽の運行にて農耕や航海の時期を判断するためのものであったようである。伊江島で朝早く海岸を歩いていたら海岸の大きな岩の上に小さな鳥居を立てた太陽の拝所らしきものを見つけたが（写真3）、民宿の主によればユタが勝手に作ったものであろう、とのことであった。伊是名島の港にある航海神を祀った御嶽と思われる巨大な岩山の上にも太陽のマークを付け「虎頭金神」と書いた小さな石碑の前に鳥居を立てたものがあつたが（写真4）、これも土地の人によれば元々あつたものではないとのことであつた。



写真2

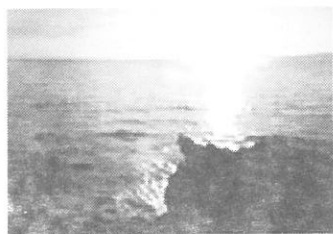


写真3

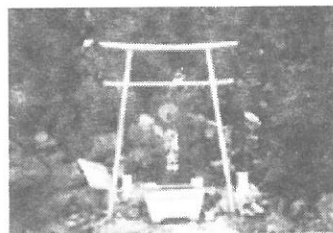


写真4

もつとも昇る朝日を遙拝する風習や宗教（例・黒住教）は日本本土でも見られる。要するに民衆の素朴な太陽崇拜を利用して、地方豪族・按司や琉球王府が自分たちをテダコ（太陽の子）と称し、自

分達の権威付けと民衆支配の手段として利用しようとしたのである。このことは大和政権などにも共通することである。

かくて人々の生活は生命の根源であり生命を育み守護する神々の根所（居所）・御嶽を中心に営まれているのである。祖先の霊・根神の眠る御嶽を祀る根家（ニヤ・宗家）を中心に血縁による村落共同体・シマないしマキヨが形成され、村人達はその中で御嶽の祭祀を中心に相互扶助の平等な共同生活を行ってきた。御嶽の神々と村人の関係は、神のセジ（霊力）による「おそい（守護・愛護）」と「くさて（腰当・信頼ないし依存）」の関係で、村人達は御願や祭祀によつて神々に感謝・祈願するのである。

御嶽の祭祀は主として根家の当主・根人（ニーチユ）の姉妹、特に長女である根神（ニীগン）、あるいはヌルないしノロ（祝女）を司祭者として村の女性達、神人（カミンチユ）達によつて行われる。詳しくは後述する。

琉球王府はノロ制度の確立など様々な方策をもつて各地の御嶽や祭祀を支配し民衆を宗教的に管理しようと努めてきたが、琉球王府を廃止して日本に併合し沖縄県とした（琉球処分）明治政府も日本の神社制度の下に御嶽を再編統御しようとした。いわゆる御嶽再編である。それは明治政府より任命された沖縄県知事早川元が企画したといわれているが、沖縄県民の皇民化政策の一環として御嶽を国家神道の下に組み入れ精神的に支配管理しようとしたものである。各シマの御嶽を一村一カ所に整理統合し天照大神のご神体である鏡を安置する神殿を建てさせ鳥居を配し、神女ではなく男の神官を任命し、日本本土のような神社の形態を整えさせようとした。それは明治政府によつて日本本土でおこなわれた、天皇を神格化しその祖神とされた天照大神を絶対化し、その祭司所・伊勢神宮の下に全国の鎮守の森を神社化し再編統合して格付けすることによつて、産土の神・氏神、諸々の神々を支配管理し、村人達を皇民化し精神的に統合支配しようとしたことと相応する。

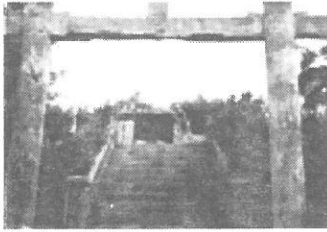


写真8

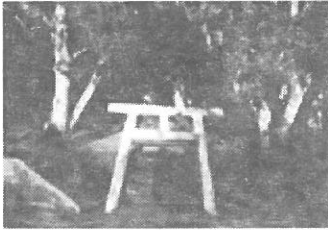


写真9



写真10



写真5



写真6

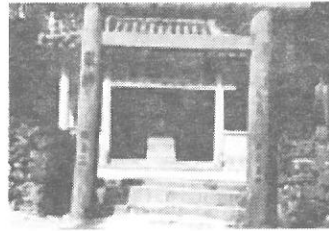


写真7

しかし御嶽再編は沖縄では村人達の抵抗で成功せず中止された。波之上宮や普天間宮（写真5）は本土の神社そのままであり、宮古島、伊良部島（写真6）などに成功例がいくつか見られた。しかし他は鳥居だけを立てたり（写真7・竹富島西塘御嶽・建物拝殿）（写真8・伊江島）、申し訳程度の小さな鳥居を立てたり（写真9・竹富島）、鳥居のみでなにもないもの（写真10・田港御嶽）などで、ほとんどは本来の御嶽のままである。



写真11



写真12



写真13

グスクあるいはグシク・スクには「城」という漢字がはめられているため日本本土の城を想像するし、また実際に立派な城壁や石垣を持つものもある。（写真11）の首里城、（写真12）の中城、（写真13）の今帰仁城、（写真14）の座喜味城、（写真15）の豊見城などはその例である。

グスク

かくて国家神道による御嶽信仰支配は挫折し、本来の沖縄の人々の心意気と信仰は守られ、米軍支配下においても変わることなく現代まで続いているのである。また御嶽の聖なる森は人手が入ることなく大切に保存され貴重な植生が自然のままに守られている。日本本土でも明治政府が鎮守の森を支配統合し、聖なる森の樹木を伐採しようとしたのを、南方熊楠が体を張って阻止しようとしたことは衆知のとおりである。



写真16



写真17



写真20



写真21



写真19



写真14



写真15



写真18

しかし琉球全土のグスクをくまなく調べた仲松弥秀氏によれば、城郭を持ったものは少なく、岩山や断崖、洞穴などもグスクと呼ばれている。そしてほとんどのグスクには人骨が発見されたり発掘されている。すなはちグスクは村の共同葬所・風葬の地であったようである。(写真16)のミントングスクは明らかに城ではなく風葬の葬所であったようで拝所がいくつか見られる(写真17・18)。

城らしい城郭を構えたグスクの奥にも必ず葬所や拝所がある。琉球開闢の女神アマミキヨが作り、玉城王が居を構えたと伝えられる名城玉城城・タマグスクの本丸には(二)の丸、三の丸は米軍が破壊。俗世と聖地を隔て、東方のニライ・カナイに通ずるという拱門(アーチ)があり(写真19、他のグスクにも大抵ある)、内部にはいくつかの拝所が設けられている(写真20、21)。

丁度御嶽巡りの婦人達が熱心に御願していた。

(写真22) (写真23) は今帰仁グスクの御嶽と拝所で、此処でも御願している人たちを見かけた。(写真24・25) は中グスクの最高所にある墓と御嶽、(写真26) は豊見グスクの拝所、(写真27) は名護グスクの御嶽、(写真28) は浦添グスクの御嶽である。

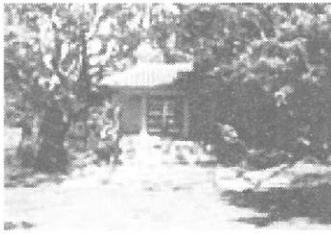


写真26

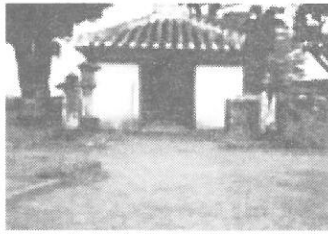


写真23



写真27



写真24



写真28



写真25



写真22

このように仲松氏の指摘のとおりグスクは古からの共同葬所・風葬の地、神となった祖霊の居所であり、後に台頭した豪族・按司達がグスクの中で防衛と支配に有効なグスクを選んで城郭を築き居宅を構えて祖霊神の庇護を期待すると共に民人を支配する権威付けにしたのではないかと思われる。

日本本土の城もまた土地の人々の信仰を集めている神の居ます聖なる山や丘に築かれたのである。古代ではだいたいの円錐形の山や丘が聖なる山、神体山として崇められたようである。(写真29)の奈良県桜井市の三輪山、(写真30)の岡山県の吉備中山などはその代表的な例である。土地の人々の信仰を集めている聖なる山や丘の上に城や寺院も築かれたようである。聖なる山はそれぞれの土地の重要な位置にあり見晴らしがよく支配や防衛に好都合であったと思われる。岡山城は岡山という聖なる丘に、姫路城は日女道丘(ひめじおか)と呼ばれる聖なる丘に築かれている。総社市の鬼ノ城と呼ばれる古代山城も元は聖なる山であったと思われる(写真31)。(薬師寺慎一氏の「古代吉備」による)



写真29

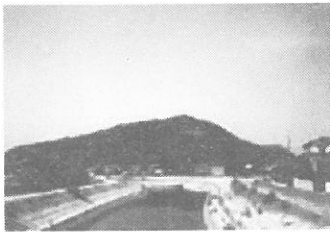


写真30

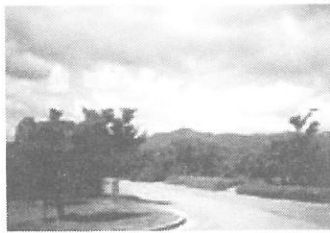


写真31

寺院としては比叡山延暦寺がその典型的な例であろう。(写真32)は鳳来寺山で山頂近くに鏡岩と呼ばれる高さ六〇メートルの大岸壁があり、その下には人骨や経筒が埋められ霊域となっている。その近辺には鳳来寺と東照宮がある。

死・靈魂・葬送

沖縄各地では人々を生かし活動せしむる生命の源泉はマブリ、一般的にはマブ

イと呼ばれる靈魂であるとみなされ、マブイはイチマブイ(生靈・単にマブイということが多い)とシニマブイ(死靈)の二つに分けて考えられている。生まれ、生きるとは身体にイチマブイが入り働くことを意味するのである。靈魂はタマシイとも呼ばれるが、タマということは本土からの伝来で、個人的なものとしてではなく、一般的に万物に宿る靈魂として理解されているようである。

マブイが正常に働く健全な生活ができるが、事故などでマブイが肉体から遊離すると(マブイウトシ)、食欲が無くなったり意気喪失し病的症状を示すようになる。そこでマブイを取り戻し正常に働くようにするために、祖母など老女やユタと呼ばれる巫女によってマブイグミという儀礼が行われるのである。

死とはイチマブイが肉体より完全に離脱してシニマブイ(死靈)となることである。肉体を離脱した後もシニマブイはしばらくは現世に漂い、イチマブイを求めて生者に取り憑き祟りや禍をもたらすと考えられている。しかし、シニマブイも家族や子孫による手厚い弔いや年忌などの死者儀礼・供養によって純化・昇華して祖靈神となりグシヨ(後生)である「あの世、ニライ・カナイ」に落ち着き、他の神々と共に子孫を見守り愛護するようになると考えられている。そこで死者儀礼が重要な意味を持つのである。



写真32

葬式のことをダビ(荼毘)というように仏教伝来以来、沖縄の伝統的な儀礼と混用されてきているようであるが、ここではできるだけ沖縄本来の死者儀礼について述べたいと思う。

命終・絶命・死は琉球列島ではモール・モルシュン・マイイサン・マースン・モル・ミールウティ・ミークイン(目を閉じるの意)などと呼ばれ、死ぬことはマールシミソーチャン・マラシタ・マールシネーなどといわれるが、八重山地方ではカンナリオリ、即ち「神になられた」という。人は死んだら神になるという思想を表している。小児の場合はヒンギタン即ちマブイが肉体より「逃げた」といわれる。

死の判定は脈拍の停止の確認や、灸をすえたり塩水を吹きかけたりして反応を見て決められる。臨終にあたっては家族や親戚が立ち会って、妊婦やその夫、家を新築中の者は立ち会ってはならないことになっている。葬儀の準備や進行はリンスとかコーとよばれる葬式組が取り仕切ることにしている。死が認定されると、シニマブイを祓い、生者から断ち切り、死者をこの世からあの世へと送り込む葬送儀礼や仕草が行われる。その一つに「ムヌウーイ」「ムンヌキ」という死靈祓いの儀式がある。ムヌはムン(もの・靈魂)で死をもたらす悪靈のことである。所によってマブイウーイ(靈魂追い)、ヤザレー(家清め)、ヤバライ(家祓い)などと呼ばれる。悪靈・死靈の排除の儀式は葬式の夜か野辺送りの時に行われる。要するに家から悪靈を追い出し祓い清めて生者から死靈を切り離す行事である。ムヌウーイは一般に棺を入れて運ぶ籠を担ぐ人々ガンムチャーによって行われる。一例を挙げると庭に臼を伏せ、まな板と包丁をその上に載せ、家中隅々に潮水をはじき砂をまいて、松明を掲げて「アネーアネー」と一人が言えば他が「クネークネー」と言って、つまり「あつちだ」「こつちだ」と言いながら死靈を家から追い出すのである。日本本土の出棺の時に藁を燃やしたり、死者が生前使っていた茶碗を割ったりする風習も死靈祓いの類であろう。

死者は別れがすんだ後棺に入れられ籠(写真33)にのせられ担が

れて葬所に運ばれる。野辺送りは家族や親戚、親しかった人々によって松明や提灯、死者の名前を書いた旗を先頭に行われる。葬列は拝所をさけて後生道（グシヨウミチ）を通り、シマ（村）と墓地の中間点で島見せ（シマミシ）、即ち死者に育ったシマとの最後の別れの儀礼を行う。葬地に着くと、棺はシルヒラシと呼ばれる墓所の一角に安置され、焼香が行われる。

死体を安置した翌日からナーチャミー（ナー）といって毎日花や水を持って葬所に行き

死者の顔や遺体を見て拝み、死後七日目のハチナンカ（初七日）まで続けるところが多い。それは死者が蘇っていないか見て、死を確認すると共に同時に生者も腐敗し始めた死体を見て死別を認知し諦める過程でもある。家族や親友が葬所に集まり死者を囲んで飲み食い歌い踊って共に過ごし死者を慰めると共に生者も永遠の別離を納得するところもあったようである。墓参はハチナンカ以後は週一回となり、シチナンカ（四十九日目）で打ちきりとなる。

シチナンカが過ぎた頃、マブイワカシ（魂分かし・八重山ではタマシバイ・タマシイバキシ）という死者の靈魂をイチミ（現世）からグシヨー（後世）に送り生者の魂と完全に分かつ儀礼を行う。マブイワカシは肉体の死に対していわば靈魂の死の儀式である。このマブイワカシによって死者は完全に生霊と訣別しグシヨーに至り死は完成することになり、死者への儀礼はすべて終わる。

マブイワカシの儀礼は沖縄各地で異なるが主として巫女ユタによって執り行われる。その儀式は地域によって様々であるが、だいたい特別な食物が用意され、ユタの口寄せが行われ、死霊の憑依したユタによって、死者に代わって死の原因、今の心境や遺族への思いが語られる。そうすることによって死者はイチミ（現世）への思



写真33

いを断ち切り、思い残すことなくグシヨー（後生）へ往くことができるのである。マブイワカシの時期死後四十九日頃という肉体の肉は完全に腐敗して無くなり骨だけになる頃である。骨化によって死霊は純化して自分の死を認知し、マブイワカシの儀礼によって潔くグシヨーに赴くと考えられたのであろう。

マブイワカシ以後の先祖供養は、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌、二十五年忌、三十三年忌の六回の年忌（ニンチ）が行われる。七年忌まではワカジュコー（ワカ）といって、まだ死霊は神化していないとみなされ、以後回を重ねるにつれて昇華し神化するとされ、三十三回忌になると、神化は完成して神となり祖霊神の仲間に入つて、子孫を見守り愛護する守護霊になると考えられているのである。従つて最後の年忌である三十三年忌はウワイジュコー（終わり焼香）とか大焼香といつて死者が神となるめでたい祭りとして盛大に祝うのである。

沖縄の人々は子孫を愛護支援する祖霊神である先祖を崇拝し、先祖と共に生きてきた。また先祖を大切に祀らないと祖霊はあの世に安住できず、子孫は不幸になると信じられてきた。よつて人々は祖先への祭り大切に、墓もできるだけ立派なものにしようと考え、一年に何回かの墓前祭を行うようになった。特に旧暦三月のシーミー（清明祭）には、ムンチュー（門中）やハラ（父系血縁集団）の人々が集まつて清明祭料理の重箱を作り酒を用意してトーシー（当世）墓の前で墓前祭を行い、先祖の霊にご馳走を供え共に食べ飲み歌い交歓して、血縁のきずなを確認し親睦を深めるのである。（写真34）は浦添ヨードレで遭遇したものである。清明祭料理の

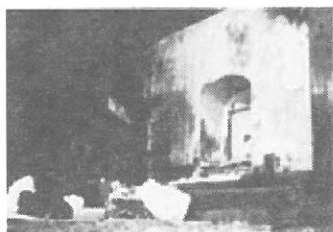


写真34

カステラカマボコを、馳走になったが、薄味で独特の味わいであった。さらに沖縄独特の葬送儀礼として洗骨による改葬がある。洗骨は死者儀礼の総仕上げであり、「死者に対する最後の孝行」である。洗骨の呼称には、シンクチ・アライ・タマギレイ（霊をきれいにする）・チュラクナスン（美しくする）、カルクナスン（軽くする）など清めを意味するもの、プニプレイ・トイウチ・クチゲー・フネトイ・クチトイ・スクイアゲなど移葬・複葬を意味するもの、タナバタ・ハルジュコーなど行事・儀式などより起こった名称、またマブリカンガタツ（守り神が立つ）・ホネオガミ・ウヴィウイシユン（産水を浴びせる）、マタダビ・マタカザミ（二度の茶毘）・タンカー（誕生祝い）などのように再生や先祖拝みなどを意味する呼称もあり、各地によって異なる。

洗骨の時期は各地によって異なるが、一般に新たな死者が出たときに洗骨する場合と、白骨化を待つて洗骨する場合が多い。門中墓、家族墓、村墓などの共同墓の場合、新たな死者が出ると、シルヒラシに置かれた遺骸は移動させなければならないのでその機会に行われる。また骨に腐肉が着いている場合は、鎌などで削り取って行われる。死者が続いた場合や、白骨化を待つ場合は仮墓や袖墓にとりあえず安置する。白骨化を待つ場合はだいたい三年から七年の間の旧暦七月七日の七夕に行われるのが一般的であった。沖縄の七夕は星祭りではなく、盆の一環で七夕盆といわれ、この日は「日なし」といって無条件に洗骨・移葬のできる日とされているのである。

洗骨は主として親戚のみで行われ、遺骨を水で洗い清めるのは肉親の婦女子で、男子は見ているだけである。骨に泡盛をかけるところもあるようである。洗骨は頭蓋骨から行われる。洗い終わり清められた遺骨は墓奥に安置する。その際頭蓋骨だけを合葬し他の骨は捨てたり、全部を壺や厨子甕に納めて奥に安置したりする。（写真35）は納骨のための壺や厨子甕である。古くなって骨董的価値の出した厨子甕を狙って盗人が墓を暴く事件が時々起こった。また墓の周

りにある銘木を勝手に切って盗むものもいる、と波照間の民宿の主人は嘆いていた。

洗骨によって死者の霊は浄化され、遺族も「気がかりが取れ、さっぱりして未練がなくなる」のである。洗骨は死者への供養であると共に、生者の悲嘆からの立ち直りの儀礼でもあるのである。

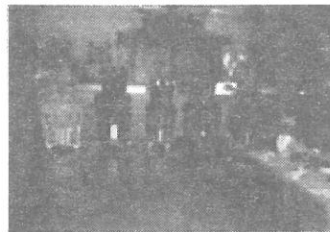


写真35-1

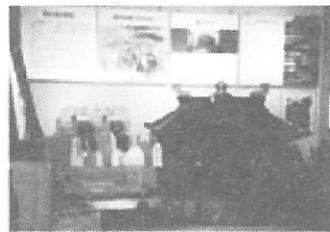


写真35-2

なお改葬（再葬）の風習は縄文時代や弥生時代などにもあったように骨を入れたように見られる土器がまとめて埋められているのが発掘されている。

幼児特に死産児の葬法については正反の二つの仕方があるようである。一つは死産した子をチムラシ（血塊）やアクマなどと呼び、葬儀もせずすぐに荒縄で縛ったりしてアダン（血塊）やアクマなどと呼び、崖の下などに放置したり、刃物で切り刻んで捨てたり、門前や四つ辻に埋めて通る人々に踏ませたところもあったようである。このような残酷な仕打ちは、死産児は冷酷に扱えば扱うほど早くこの世に健全な状態で再生するという考えがあったからのようである。

他方は、死産児を火の神ヒヌカンを祀る竈の側や台所の下に埋め

たり、屋根から雨垂れの落ちる下や外側に埋める場合である。このことは死産児を家の守護神とする風習ともみられるが、やはり女性の最も留まることの多い場所あるいは近くに埋めて、すこしでも早く胎内に入り再生することを願ったもので、門前や四つ辻に埋めたものも上を通る女性の胎内に早く入ることを願ったものといふことができよう。

(酒井卯作氏の説による)

なお縄文時代の住居跡からも家屋の入り口や奥に埋められた幼児の遺体を入れたらしい壺が発掘されているのも、また土偶のほとんどが妊婦であるのも、同じく早期の再生を願ったものであろう(写真36・三内丸山遺跡)。

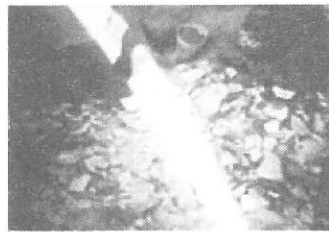


写真36

葬制・葬墓

沖縄では死体を野ざらしにする風葬(曝葬・空葬)が明治初期、地方によつては昭和の時代まで行われていた。棺を樹に吊り下げる樹上葬も国頭地方では行われたようであるが、一般にはシマ(村)で定められた山上や森や林の中、洞窟や崖下などに遺体を置いて菰や衣を被せたり、棺に入れたまま放置したりしたようである。白骨化した骨はそのまま放置されたり、洗骨して所定の場所に置かれたり骨壺や甕に納められた。葬式の後七日毎日遺体に会いに行ったり、着物や副葬品が盗まれないか監視したのもこのような状況であったからである。祖先が葬られた風葬の地が御嶽やグスクなど聖なる地として崇められるようになったことは先述のとおりである。風葬の習俗は石灰岩でできた土地のため深い墓穴が掘れないためか、腐敗が早い亜熱帯の風土や靈魂の抜けた亡軀にはあまり関心を払わ

ないためか、さらに洗骨による改葬の風習などによるのであろうか。風葬の風習は未開発国各地に見られ、日本古代中世にも山や野に風葬による合葬が行われたことは餓鬼草紙などで認められる(写真37)。京都の鳥辺野や化野、奈良の地獄谷などがその跡とみなされている。(写真38)は奈良の地獄谷とそこに彫られた石仏である。

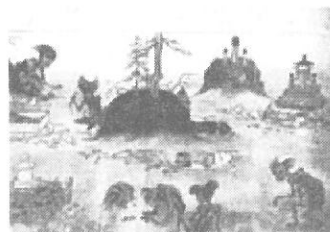


写真37



写真38



写真38 2

風葬が行われていた頃の調査報告によれば風葬地には遺骨が散乱していた記録や写真が掲載されているが、現在は遺骨はかたづけられ整地されていてその痕跡すら定かではない。現在訪ねることのできるのは、斎場御嶽の側の風葬跡(写真39)と玉泉洞側の「死者の谷」と呼ばれる風葬の遺跡公園である。(写真40)は死者の谷のかつて遺体が置かれた所で、白骨化した遺骨は(写真41)のような木の箱に集め入れられるか、(写真42)のように壺に集め納められた。

やがて遺体は平地に野ざらしにされるだけでなく、平たい岩の上や石を積んで平たくした台の上に載せたり（台葬・写真43）、また石を積んで囲いその中に置かれるようになった（写真44）。



写真43



写真44

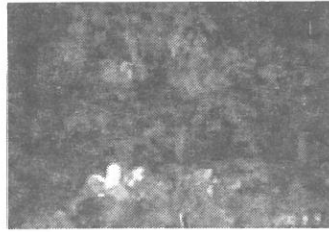


写真41



写真39



写真42

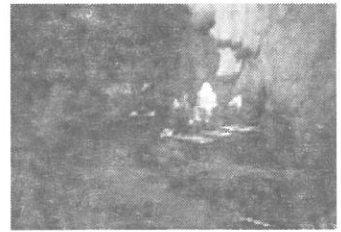


写真40

さらに積み石で完全に囲み塞いで墓室を作った石積墓（写真45）が作られ、その中に遺体や遺骨が納められるようになったようである。沖縄戦では死者の谷も戦場となったようで、（写真46）のように風葬跡に銃眼が作られており、「秋風や風葬跡の銃座かな」という俳句の短冊が掲げられていた。珊瑚石灰岩でできた琉球列島にはガマと呼ばれる洞窟や鍾乳洞が多い。したがって洞窟が風葬などの合葬所として用いられるのは自然なことであろう。

葬所としての洞窟はトール・ムヤ・ガマなどと呼ばれ、各地に見られる。かつてはおびただしい遺骨があつたと記録されているが、今はきれいに片づけられるか、塞がれている（写真47・伊江島、48・与論島、49・浦添）。（写真50）は久米島の風葬の洞窟であるが、積み石で半分塞がれ、中は暗くてよく見えない。（写真51）は与論島の完全に塞がれた洞窟である。（写真52）は与論島の洞窟の若い女性の遺体が置かれていたという風葬跡である。

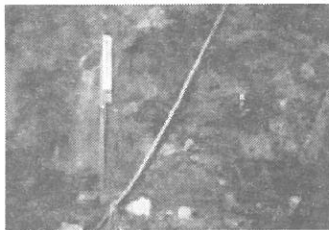


写真46

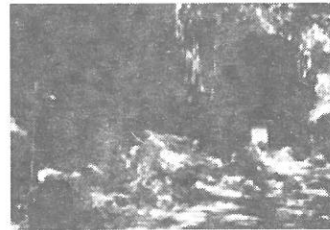


写真45

小さな洞穴を利用した墓は至る所にみられるが、その場合洞窟の前に遺体を置いて白骨化させ、遺骨を洗骨して甕などに入れ洞窟の中に納め、入り口を塞いだ。適当な洞窟がない場合、崖下などに横穴を掘って墓としたものも多い(写真53・宮古、54・伊良部、55・今帰仁など)。



写真50

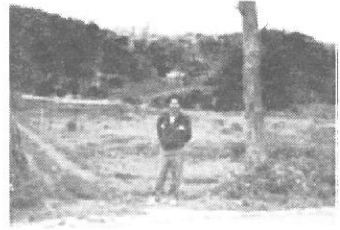


写真47



写真51



写真48



写真52

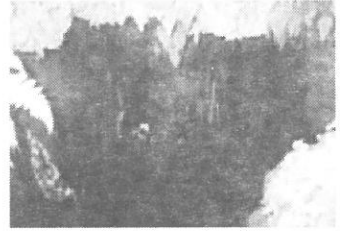


写真49



写真56



写真53

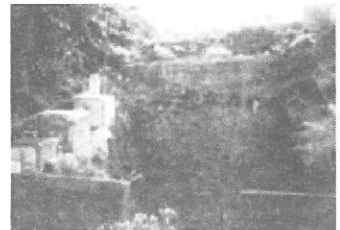


写真54



写真57



写真55

地方豪族・按司の出現と共に墓はだんだん大きなものとなるが、洞窟葬ないし堀込みの横穴式墓から発展したものであろう。(写真56)は運天港、(写真57)は石垣島川平、(写真58)は宜野湾市小緑墓、(写真59・60)は宮古にある墓で、石垣で囲い入り口に魔よけのフィンブンを立てさらにこの世とあの世を分ける石垣のアーチ門を作りその奥に堀込み式墓を設けている。



写真61



写真62



写真63

王陵(琉球王朝の墓・首里)

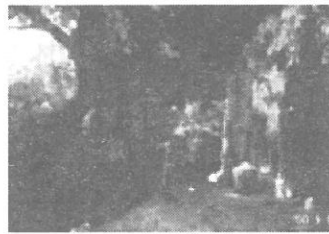


写真58

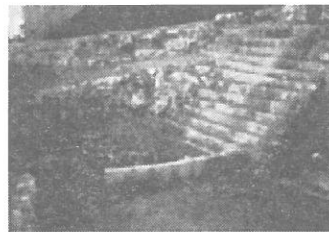


写真59



写真60

琉球王府時代になると権力の象徴として堀込み洞穴の前に石造の家型墓が作られ、破風墓と呼ばれている。(写真61)は伊是名島の玉御殿、(写真62)は浦添ようどれ、(写真63)は玉陵(霊御殿)である。破風墓を一般庶民が作るとは禁じられていた。

これらの大規模な墓では内部に遺体を白骨化させる場所シルヒラシが設けられ、遺骨は洗骨後豪華な厨子甕に納められ墓の中央ないし奥に安置されている。
横穴墓は日本本土でも古代に山鹿市周辺に作られており、鍋田の横穴墓では崖壁に絵が堀り込まれている(写真64・65・66)。



写真64



写真65



写真66

久高島では昭和四十年頃まで海辺の断崖下で風葬が行われ(崖葬)、十二年目ごとの寅年に一斉に洗骨が行われる風習が残っていたが、写真家が村民の制止を打ち払って棺の蓋を開けて遺骸や遺骨の写真を撮り興味本位に雑誌や本に載せたため、その機会に風葬は行われなくなり、筆者が訪れたときは立ち入り禁止になっていた。

適当な洞窟や断崖のない地方や島では美しい珊瑚の砂浜に埋めたり（砂葬）、珊瑚石灰岩を積み上げたり石垣にしてテーブル珊瑚で蓋をして作った石積み墓の中に合葬した。（写真67）は波照間島、（写真68）は宮古の来間島のものである。また宮古では（写真69）のよなミヤーカと呼ばれる巨石墓も作られている。

写真67



写真68



写真69



十七世紀後半になると琉球王朝支配階層で中国華南より到来したといわれるカーミナクーバカ（亀甲墓）が作られるようになった。亀甲墓は文字通り亀の甲に似た墓で、フンシー（風水・民俗地理学）と共に伝播し、沖縄を代表する墓となった。風水・フンシーは中国古代に興り、この世の住所である村落や家屋、来世の住所である墓を地勢上最高の位置に作り、家運の隆盛や子孫の繁栄を招来せんとする地理探究の呪術的地理学である。

風水で理想の地勢とされるのは、北に高山（主山・龍頭）があつて北風を防ぎ、東西の山脈（東・青龍、西・白虎）に囲まれ、南が開けており、さらに南には小山があつて邪気を防ぎ、盆地の中心に

は龍穴があつて泉が湧き、山に降った雨が集まっていくつかの河川となつて南に流れ出ていて、竜頭からの気が龍穴のあたりに満ち満ちている処（明堂）が最善の場所とされている（図一、渡邊欣雄氏による）。



図1 理想的風水図

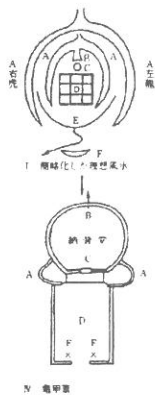


図2

図に見られるとおり最善の場所は女性性器の中心・子宮に当る処である。北東西の風を防ぎ南が開け、水に困ることがない場所、いうまでもなく住むには最高の場所である。沖縄の古い村落は北に山や丘の森があり、その頂上が御嶽（葬所）となつており、その南下に宗家ムトウがあつてその下に一族の村落ができていた。早くから風水の何らかの影響があつたのではないかといわれている。祖先崇拜の念の強い人々は自分たちの住所だけでなく、先祖の墓も理想の場所に作ろうとしたのである。やがて風水の策定に風水士や霊媒師ユタが関与するようになって迷信化し、逆に人々の心を惑わしたりするようになった。

亀甲墓は地勢上、形態上においても理想的風水を原型として造られているのである（図2・同）。母胎は人間にとって生命の根源であり最も安穩快適な理想の居所であり、天国觀念のモデルとも考えられている。女性が仰向けに寝てお産をする形に擬せられる亀甲墓は正に人間の理想を具現しようとしたものであろう。亀甲墓に葬ることは死者を理想の根源に返し、さらに新たに生まれること、再生を願つており、人は死ぬと根源ムトウにかえるという帰元思想の表

出ともみなされている。

最も古い亀甲墓は那覇市の伊江御殿家のものといわれているが、最初の頃は掘り込み墓や破風墓の技術を応用し丘を掘り込んで築造したものである（写真70）。さらに丘を削って石垣を積んで巻きアーチ型の屋根を造って土砂を載せた、石造門や石橋造りの技術を応用したものも造られている。（写真71）は石垣島のもので遺体が納められたばかりである。亀甲墓の中は墓口の近くに遺体の白骨化を待つ処シルヒラシドクルが砂などを敷いて設けられ、奥に洗骨後に骨を納める厨子甕や骨壺を置くようになっており棚が造られていることもある。母胎の両足の間にあたる庭で親族が集まり清明祭が行われるのである。

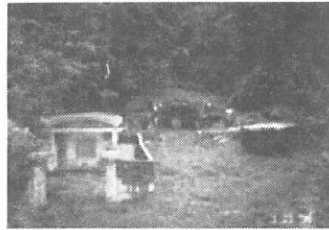


写真70

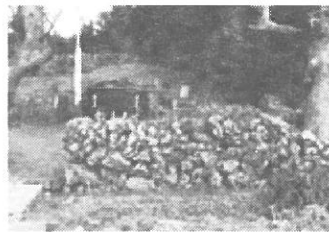


写真71



写真75



写真76



写真77

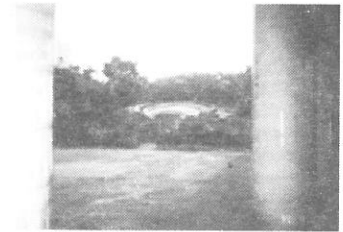


写真72

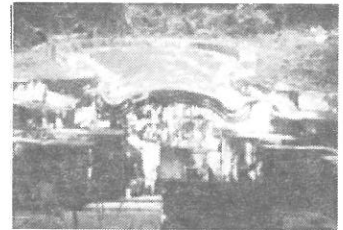


写真73

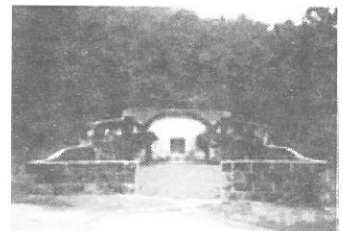


写真74

琉球王府は破風墓と共に亀甲墓も庶民が造ることを禁止したので、一般に自由に造営できるようになったのは明治中期以後で、昭和初期まで各地で琉球石灰岩やコンクリートで立派な亀甲墓がさかんに造られた。（写真72）は宜野湾市、（写真73）は座間味島、（写真74）は伊平屋島、（写真75）は竹富島、（写真76）は波照間島のもので、（写真77）は与那国島の亀甲墓群である。

亀甲墓を造るには莫大な費用と労力があるので人々はムンチュー（門中）やハラなど血縁集団や隣近所や親しい仲間などと組んで共同で造営した。祖先崇拜の念の強い沖縄の人々にとっては墓造りは人生の一大事業であったのである。門中墓の代表的なものは糸満市の幸地一族による幸地原門中の墓で、およそ百坪の土地に本墓と七基の仮墓が造られている（写真78）。

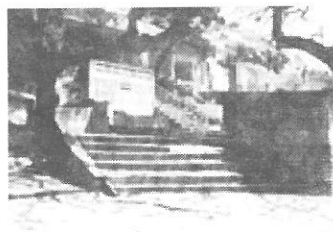


写真78

日本本土で亀甲墓に似た墓は肥後古代の森にある安産の神様として親しまれているオブサン古墳（写真79）で、妊婦がお産する「産（うぶ）さん」から転訛したとみなされている。古代肥後は中国との交流が深かったので「風水」の影響を受けたのかもしれない。この地方には古墳玄室に死後の世界を描いたと思われる装飾古墳が数多く見られる。（写真80）はチブサン古墳玄室の絵である。

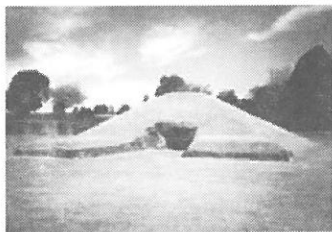


写真79



写真80

日本本土で古墳時代に盛んに造られた古墳も中国の影響を強く受けているので、風水の影響も受けているように思われる。特に前方後円墳はその上から見た形態からして風水思想を元に造られたのではなからうか。

沖縄でも火葬が一般的になるに従って小規模のコンクリート製の屋形墓やグアハ力が一般に造られるようになった。また箱形の納骨室の上に日本式の石塔墓も一般化している（写真81・竹富島、82・宮古、83・与論島）。



写真81



写真82

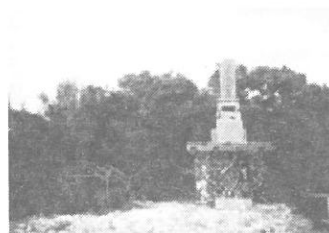


写真83

与論島には死者の靈魂の居所であると共のその封鎖もするモガリ（荒城）あるいは喪屋の風習が今も残っている（写真84）。モガリの中や側には故人の使用していた食器や履き物が置いてあり水なども供えられて故人の霊の生活を支えている（写真85）。白骨化した遺骨は所定の時に掘り出され洗骨して甕や石塔墓の納骨室に納められるのである（写真86）。墓場で出会った夫の墓参りに来ていたおばあ

さんは「昔は（洞窟の中で）皆一緒にあったが、今はこうしてばらばらにされておじいさんも淋しいじゃろうて」と洞窟での合葬の頃を懐かしんでいた。

写真84

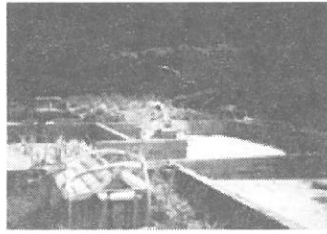


写真85

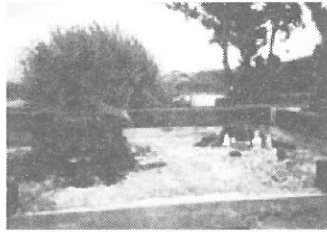
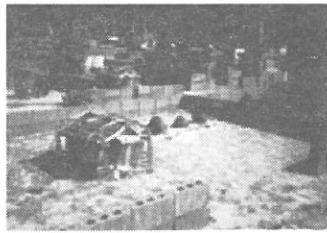


写真86



葬法で特徴あるものは縄文時代の環状列石（後述）や弥生時代の甕棺葬（写真87）があり、北海道のモヨロ遺跡では頭部に甕を被せて葬られた遺骨が発掘されている（写真88）。墓で特色あるのは種子島の御拝墓である（写真89）。

写真87

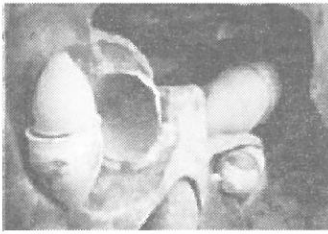


写真88



写真89



根源・霊石・再生信仰

沖縄では一般にマブイワカシによって死者の肉体を離れた死霊シニマブイは遺族の手厚い供養によって浄化され、やがてグシヨウ後生の居所ニライ・カナイに至り、祖霊神となってセジ霊力をもつて子孫を愛護し、豊饒を与え、時に応じて里の御嶽に帰り祭られ子孫と交歓し供養を受けウガン御願を聞き慰める。そして時が来れば母胎に宿り、子どもとして産まれこの世に再生する、と考えられている。森林の少ない沖縄諸島では木は貴重品で嵐の後海岸に打ち上げられた大木はニライ・カナイからの神の贈り物として感謝されたのである。久高島にはニライ・カナイから作物の種子が届けられたといわれている浜辺がある。

ニライ・カナイの古い語形はミルヤ・カナヤで、その語源は「土の家・太陽の家」という語意をもつといわれ、すなわち生命の根源を意味しているのである。またオモロではミルヤ・カナヤは「てだがあな（太陽の穴・居所）」で、消耗し沈んだ太陽が帰り休み活力を取り戻し蘇って「ワカタダ（若太陽）」となって再生するところとみなされている。このようにニライ・カナイは太陽の運行との類比によって、生と死と再生の根源的な場と考えられるようになったということができよう。

ニライ・カナイは遙か海の彼方に存在するとみなすものと、深い海の底に存在するという考え方があがあるが、資源が少なく稲作にも適しない土地に住み、貧しい生活を強いられた沖縄の人々にとっては、海は交易と漁労によって多くの恵みを与えてくれる生命と豊饒の元であるので、海の彼方に永遠の楽土を想定するのは当然であろう。海底のミルヤは沖縄でも童宮信仰や大漁や航海安全を祈願する童宮願いの祭り、童宮伝説をもたらした。さらに海底のミルヤは再生の場であると共に害虫やネズミなど悪しき物を送り込み封鎖するところともみなされている。

このようにニライ・カナイは死と再生の両義的意味を持った根源

の国なのである。海の彼方に永遠の楽土を想定するのは海洋渡来民族の特性ともいわれているが、日本本土でも古代民族は他界「常世の国」を海の彼方に想定していた。伊勢の二見浦の夫婦岩の向こうは常世に通ずる他界と見なされていたようである。波照間島ではニライ・カナイをめざして船出した人々の伝説があるが、観音浄土をめざして船出した熊野の補陀落渡海に通ずるものであろう。

死への恐怖は本能的なものであるが、さらに自己の存在と願望の断絶・滅無への恐怖でもある。その恐怖は死骸がむごたしく腐敗変容していくのを目の当たりにすることによってさらに増幅される。平均寿命が短く、死骸の腐敗を目にせざるをえなかった時代においては、死は現代以上に不安・恐怖・痛切の極みであったであろう。この恐怖と悲哀を慰撫するものは霊魂の不死と再生への願望と信仰であろう。生存条件の過酷な沖縄の人々にとってはマブイ（霊魂）の存在とその再生・循環の信仰は自然なことであり、生存の根源、生活の拠り所であり、祖霊神との交歓・祭りは生活行事の中心である。

生殖・子供を持つことへの強い執着は生物としての本能的なものであると同時に、自己、あるいは一族の存続・再生への強烈な願望でもある。しかし受胎は人間の意志や願望を超えてどうにもならない面がある。妊娠が女性の使命とされた時代においては女性にとっては切実な事柄であった。子授け・安産・安育祈願が女性の信仰と御願の中心となる。子どもはニライ・カナイからの授かりものである。かくて沖縄の女性達は海の彼方に



写真90



写真91



写真92

向かいニライ・カナイの神々に子授けの祈願を行うのである。（写真90）は伊是名島のニライ・カナイへの子授け祈願の拝所の浜辺といわれているところで、島の夫婦岩は神の依り代である。

古代より岩山や巨岩、玉（丸）石や立石は堅固不動・永遠不朽なるをもつて不死を仮託され霊的な存在、神の鎮座するところ・依り代として信仰崇拝されてきたが、沖縄においても岩山や巨岩、立石あるいは石組みが御嶽やイビとして祀られている。とくに再生信仰の依り代として男性や女性の象徴に似た凹凸の岩石が子授けの神の依り代、聖なる岩石、霊石として信仰されている。家族の守り神、竈神・火の神も三個の大小の神石で表されている。（写真91・92）は斎場御嶽の男女の霊岩である。

（写真93）は普天間宮の本来の男女霊岩の拝所である。（写真94・95）は玉城城の男岩と女岩、（写真96・97）は玉泉洞近くの珍々洞、満々洞の霊験あらたかな子授けの霊石である。満々洞は危険なため残念ながら立ち入り禁止となっていた。

(写真98・99)は久米島の子宝の神として信仰されている女岩ミーフガーとガラサー山の男岩である。(写真100)は伊是名島の龍神御嶽で女性の神である。
伊江島のニヤーテイヤガマ内の子授けの神石は男女の組み合わせになっている(写真101)。沖縄戦ではこの洞窟で多数の島民が助か

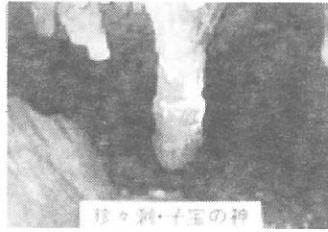


写真96

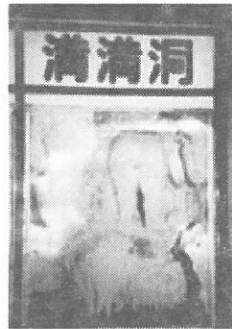


写真97

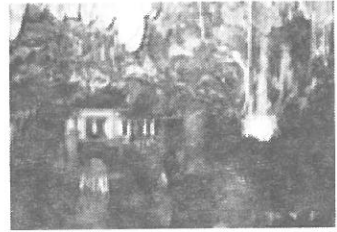


写真93

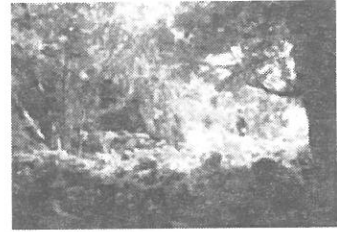


写真94



写真95



写真101



写真102



写真98

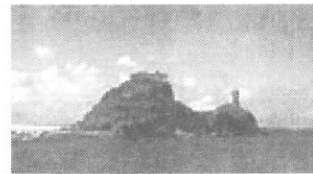


写真99



写真100

り千人洞と呼ばれている。(写真102)は天の岩戸と呼ばれる巨大なクマヤの岩穴の入り口であるが、岩穴内には拝所があり、母胎を象徴した子授けの神と思われる。

海岸添いの起立した立岩や立石が御嶽ないし神石として崇拝される例も各地に見られる。(写真103)は辺戸岬の霊岩である。男性の象徴の形に似た石は各地で霊石として崇められている。(写真104)宮古島の通称人頭税石と呼ばれたものであるが、元々は霊石であつ

たのではないかと見なされている。



写真103



写真104

霊石として祀られた一メートル以内の人型・長丸型の自然石はビズル・ビンジリ・ビジュールなどと呼ばれ、祀る祠や洞穴はティラ・テラといわれている。十六羅漢の筆頭の賓頭廬の転訛したものである。ビジュールは本土と同様子授け・子育てだけでなく様々な祈願をかなえてくれると信じられている。また祈願した海岸で拾った石を持ち帰り、重軽石の守護神として占いに使ったりすることもあるようである。また岩石は魔除けの霊石として門横に置いたり、「石敢当」と彫り込んで道の辻や突き当たりを立てたりもされている。このように岩石は霊的な力セジを持つものとして様々な仕方信仰されているのである。

霊石と共に、ガジユマルやクバなど生命力・繁殖力の強い樹木もセジ（霊力）高い霊樹として崇拜され御嶽として祀られていることはすでに述べた。霊的な岩山や巨岩や断崖の麓、丘上の深い樹林は葬所ともなり御嶽の原初的な形態を持つものと思われる。

大きな岩穴や洞窟の多くは葬所となっているが、死者の霊は洞窟の奥穴を通じてニライ・カナイないしニライスクに至ると考えられている。浜比嘉島のシルミチューの墓といわれる岩穴には陰石が祀

られているが、これも再生祈願の象徴であろう。岩穴や洞窟は母胎のイメージを持ってみられているようである。（写真105）は宮古・東平安名岬のママヤの墓といわれている岩穴である。



写真105

なんといっても再生願望・信仰を最もよく顕現しているのが亀甲墓であろう。前述のように亀甲墓の内部は母胎を表し、その形は出産の状態を表現しているとみなされているように、死者が母胎に帰り再び産まれることを祈願しているのである。このように沖縄では靈魂の生・死・再生という循環が信仰の基本概念となっているのである。（続く）

二〇〇二年 十月三十一日受付
二〇〇二年十二月二十五日受理